
昨日見た夢 またはいつかの妄想

海山ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昨日見た夢 またはいつかの妄想

【Nコード】

N3937Z

【作者名】

海山ヒロ

【あらすじ】

俺の前にいま、見たこともない女がいる。

「イヤ……だめ……」

彼女は泣きそうな顔でふると首をふり、自分を抱きしめる手にぎゅっと力をいれ、ふらつきながら後ずさった。

彼の驚愕（前書き）

毎度ブログからの転載です。R18ではない……と思います。ふと思いつくままに。

彼の驚愕

俺の前にいま、見たこともない女がいる。

「ダ、メ……………いま、触っちゃ……………」

猫のようなすこしつりあがった目元を薄紅色に染め、か細い声でそう言いながら、彼女は俺の手から逃れようとしている。

「イヤ……………」

ここはベッドの上ではない。

うすぐらいどこぞの密室でもない。

俺が彼女を組み敷いて、無理やりコトにおよぼうとしているわけでも、もちろんない。

接待相手を笑顔でタクシーに押し込み、ほっと一息ついた繁華街の、往来のと真ん中だ。

「え……………」

めずらしく酔っているな、とは思っていた。

先ほどまで同じ接待の席にいたこの同僚は、女といえど社内でも酒豪と呼ばれ、朝まで飲もうともつぶれるはおろか、その立て板に水の営業トークが途切れることすらなかった。

なのに、一軒目の居酒屋で乾杯の生中を飲みほした時点で頬を赤ら

めていたのだ。

体調でも悪いのか。

少々心配になった俺は、できるだけ酒を回さないよう努力はしたが。

いかんせん今夜の主役、A部長は彼女がすぐぶるお気に入り。

部下たちは俺にまかせ、ほとんど独占状態で差しつ差されつ、2軒目のクラブでは、お姉さんたちをさしおき彼女を横にはべらせ終始ご機嫌であった。

で。

もう一軒と言いかける部長様をなんとかタクシーにねじ込み、部下の皆さまもお帰り頂いて、本日の任務は無事完了。おつかれしたーと伸びをした俺の横で。

「はぁ……」

一秒前まで赤い顔ながらも完璧な営業スマイルをうかべていたはずの同僚が、妙に悩ましかったため息とともにふらっと倒れそうになった。

「へ？おい……大丈夫かよ」

支えようと思わず伸ばした手が、スーツの肩に触れた瞬間、

「アッ」

びっくりと、彼女がはねた。

で。俺は途方にくれることになったのだ。

5センチヒールのパンプスを危うく踏みしめながら、彼女はなんとか態勢を整えようとしている。

酔っぱらいの千鳥足ともちがう、奇妙なダンス。

いつもはしっかり小脇に抱える営業靴を足元にほうりだし、俺が触れた左肩を右手でさすり、左手は右肩を―――ようは、自分を抱きしめているような姿勢だ。

まるで痛みでもこらえているみたいに。

「おい……どうした？」

はつきり言って、変だ。

彼女とは仕事の打ち上げや今日のような接待で何度もいっしょに呑んだことがあるが、こんな奇妙な行動をとったことなどない。

「怪我でもしたのか？」

そんなわけないだろうと自らにツツコミつつ、もう一度手をのばした。
と。

「イヤ……だめ……」

彼女は泣きそうな顔でふると首をふり、自分を抱きしめる手にぎゅっと力をいれ、ふらつきながら後ずさった。

彼のつつこみと疑問

「イヤ……だめ………」

彼女の泣きそうな顔などいままで見たこともなかったから、反応がおくれた。

ここは確かに居酒屋やクラブやスナックが林立する飲み屋街で、千鳥足のおっさんや大声で笑いあう学生たちが通りすぎちゃいるけれど。

おびえるように首をふり逃げようとする女と、それに手をのばす男はやっぱり目立つようで。

行き過ぎる酔客の視線がいたい。

「おい園田。どうしたんだよ」

とりあえず知り合い同士であることをアピール（誰にだ？）すべく、彼女の名前を呼ぶ。

彼女の放りっぱなしの鞆を拾い上げ、

「気分でも悪いのか？それならはやく帰ろうぜ」

宿泊先のホテルに戻るべくうながす。

「あ………。ごめん。気分は、大丈夫」

俺の手が鞆でふさがり、もう触られないと安心したのか（だって

それが原因としか考えられないだろう？）、彼女がようやく答えた。その声はあくまでか細く、まるでため息を吐くようだけれど。オフィスの端から端に響くような、いつものはりと迫力なぞ、望むべくもなく。

おいおい。何なんだよ。

よく知っていたはずの同僚の不可解な言動に、イライラがつのつたが、俺はともかくタクシーを探した。

まあいい。本人は否定するが、酔って気分でも悪いんだろ。ホテルに帰って一晩寝りゃ治るさ。

幸いすぐにタクシーが来て、鞆をもったまま片手をあげて呼びとめる。

正直俺だっちはやく寝たい。今日は移動も長かったし、このところプレゼンの準備で睡眠不足が続いていた。

「まあ：無事終わってよかったな。商談もまとまったし」

気分が悪いだろうと独りぎめした彼女を先に乗せるべく、なかばひとり言のように言いながら開いた扉の前で待つ。

が。

「お前……ほんとになにやってんの？」

あいかわらず自分を抱きしめるように腕を身体にまわし、彼女はそろりそろりと身をかがめ、ものすごいスローペースでタクシーに乗り込もうとしている。

何度でも言うがここは飲み屋街だ。夜もだいぶ更けたとはいえ、通行人も多けりやそれを拾おうと待つタクシーも多いわけで。

「ほら、さっさと乗らないと後ろから煽られんぞ」

彼女の奇妙な行動にいかげんイラついていた俺は、二人分の鞆を座席にほうりこみ、彼女の肩を乱暴につかんで自分ごと座席に押し込んだ。

「——ッ！」

いいかげんにしてくれ。

「あ、運転手さん。○×ホテルまでお願いします」

息をのむ彼女を見ないふりして目的地を告げ、シートにどっかりもたれかかった。

タクシーは、通行人をよけながらゆっくりと走る。

自分の担当地区ではないので詳しくはないが、行きから考えればホテルまで10分どころか。

ホテル戻って、とりあえずひとつ風呂あびて、あゝメールチェックは……明日でいいか。

「あ、そういや部長へのお礼メールは…」

ふと思いついて、妙に静かな隣に声をかけると、

「…………おい。本当に大丈夫か、お前」

俺が触った、というより押しやった肩をぎゅっと握りしめ、窓に身を押しつけるようにして小刻みに震えながら、彼女が浅い息を吐いていた。

彼の確信

え、俺そんなに強く押したか？
すこし焦った。」

「おい……」

さっきから肩に触れるたび過剰に反応しているから、実は脱臼（いやでもどこで？）でもしてるかもしれない。
だからとりあえず、肩以外の場所に手をのぼした。

「熱でもあるのか？どっかぶつけたとか？」
「ひゃっ！」

指がそのきれいにカーブを描く頬に触れたかふれないか。
その刹那、彼女はぎゅっと閉じていた大きな目を見開き、奇妙な声をあげて俺をみかえした。

「オイ……」

思わず手をひく。

「あ、ゴメン、……ちょっと……今は、」

触らないで。

ようやく自分の行動を説明する気になったのか、俺が触れたか頬を隠すように手でおおって、彼女が言う。

「ああ……わりい……」

中途半端にのぼした手をそろそろと戻し、腕組する。

俺としたことが。いま、ようやく気づいた。

できるだけ距離を取ろうと扉にぴったりへばりつき、すこし力はゆるめたようだがこわばったままの彼女を、改めて見つめる。

おびえ見開かれ、潤んだ瞳。

こきざみに震える身体。

浅い呼吸をくりかえし、開いたままの紅い唇。

酔ったように（いや実際かなり酒は入っているけれど）とろんとした目許。

なにかを耐えるようにひそめられた眉といい、これは……………。

「お前さ、酔うと感じがやすくなんの？」

沸き上がる悪戯心を押さえかね。俺と彼女の間、たっぷり一人分あいた座席に手をつき身をのりだして、朱くなった彼女の耳に息を吹き込むように、囁いてみた。

「やあっ……！」

耳をおさえ、怯えたようにこちらをみる大きな瞳。その目尻に浮かんだ涙が、なによりの答えだった。

「なるほどねえ……」

何故かゆるんできた口元を隠しながら、俺はひとり、呟いた。

同じ時期に途中入社して、はや……3年か。

同じチームに配属されたのは、半年前。それまでも何度かこいつとは仕事で関わってはきた。

俺と同じく根っからの営業人間で、酒に強くてよく喋る。誰かの後をついてくのではなく、自分でさっさと道を切り拓き、グループの中ではいつの間にか仕切り役になってしまう。仕事はそつなくさりげなく。社内では社長に対してだろうと物おじしない。

仕事で頼れる同士ではあっても、いままで彼女を、「女」として見たことなどなかった。

そう。今までは。

「お客さん、着きましたよ」

運ちゃんの声に軽く相槌をうち、さっさと清算をすませた。
座席の床に放ったままの鞆ふたつを忘れずつかみ、先に降りる。

「どうした？はやく降りろよ」

開いたタクシーの扉に手をかけ、もはやにやけた顔を隠すことな
く、赤い顔でまだ耳を押えたままの彼女を見下ろす。

今夜はまだ眠れそうにない。

彼女の困惑 彼の思惑

神様これはなにかの罰ですか？

園田真理子は、自分が現在陥っている状況を、いまだに理解できないでいた。

「ひうつ…！そこ、や……やめ、やめ、も、願っ…い……っ」

もう何度目かわからない、そしていままでの経緯から徒労になることがわかりきっている哀願を、それでも真理子は繰り返した。

繰り返さずにはいられない。部屋に連れこまれ、ベッドに組み敷かれ（正確には放り投げられ）てから弄られつづけている突起から、熱い電流が足のつま先まで駆け抜け、瞬間、息がとまる。それを止めてくれるのであれば。せめて一息つかせてくれるのであれば。

もうこのまま息絶えたほうが楽な気がする。

「なんで？ここは…気持ちよさそうだけど？」

上着をベッドサイドの椅子の背にかけ、ネクタイをとりさり襟をくつろげた男——会社の、ただの同僚だったはずの男——は、息すら乱さず実に楽しそうにそう言う。

その揶揄をたっぷりふくんだ言葉も、真理子は今夜何度となく聞いている。

そして思い知らせるようにねじ込まれた2本から3本に増えた長い指で、中をかき回される行為も。

「も…やあ…っ！」

耳を犯す水音にあらがうように、真理子が掠れた声をあげる。

男の襟元をただしていたネクタイが、いまは彼女の手首を拘束しているため、耳をふさぐことも、不埒なその手を阻むこともできない。男の指にあわせて動きそうになる腰をなんとか押え、ただ背を弓なりにして、鋭敏すぎる身体に響きわたる責め苦のような快感をやりすごそうとする。

「ひっ…やあっ、お願いっ…許しっ…て、お願いっ」

日ごろのプライドや負けん気など、幾度となくこぼした涙と汗と唾液と愛液で、とうの昔に流れ去ってしまった。

「ひああッ」

これ以上ないほど尖らされた胸の飾りを噛むこの男に、吸い取られてしまったのかもしれない。

「こんなに嬉しそうに啜え込んでるのに。やめちゃかわいそうだろう？」

フロアランプのほの暗い灯りを受けててらと光る、男の唇がいやらしい。

「それにしても……………」

ねじ込み、かき回す指と手はそのままに。上から覗き込む態勢にもさすがに飽きたのか、ベッドをきしませて男がうちふるえる真理子の傍らに横たわる。

「結構長いつきあいになるのに、おまえがこんないい声で啼くとは知らなかったな」

ひどくうれしそうな声音で、彼女のやわらかい耳たぶをねぶりながら囁く。

「ふんんっ……」

耳穴にまで忍びよる熱い舌から逃れようと、緩慢に頭をふりながらも、漏れでる声はおさえられない。

「…こっち、だつてっ…」

涙と度がすぎる快感に閉じようとする目を必死に開き、のしかかる男を睨みつける。

「なに？」

「こっち、だつて、……あくっ………あなたが、こんなに…底意地の悪い、男だったなんて……んんっ、知らなかった、わよっ」

愉しげに口角をあげて覗き込むその顔に叩きつけてやろうとした言葉は、身体のうちと外を縦横無尽に這いまわる指と手のせいで、喘ぎまじりになってしまった。

今夜。こんな予定ではなかった。

もちろんこんな風にこの男に組み敷かれ、翻弄され、身も世もなくもだえ狂うなぞ想像していたわけもなかった。

朝からすこし熱っぽいなどは、思っていたのだ。

プレゼン終了までは気力で乗り切ったものの、会食の席にむかう前、念のためにと買っておいた液状の風邪薬を飲んだ。

それが仇となるなど誰がわかるだろう。

生薬配合で眠くならないタイプですから、風邪のひきはじめにいいですよ。

そうにっこりわらって手渡してくださった、薬局のお姉さん。薬の効きすぎる体質のわたしが、悪かったんでしょうか？

おかげで食事中から肌がざわざわと落ち着かず、はては異変に気が付きあまつさえもそれを利用したこの男に、

「ビジネスホテルの割には、ここ壁厚そうだけど……さすがに漏れるよ？」

笑いながらそうたしなめられるほどの嬌声が、喉の奥から幾度もほとばしってしまうはめに陥ったのだ。

「ふん……」

その声で、のしかかる男がまとう空気が変わっていることに、思考の迷宮にはまりかけていた真理子はようやく気付いた。

長年営業でつちかった勘が、いまずぐこの場を離れろと、最上級のアラートを鳴らし続けていたのだが、虐められつづけてばやけた頭と身体では反応できなかったのだ。

「……肩に触れただけで面白いくらい敏感に反応するし、泣いたところなんて見たこともなかったお前がボロボロ泣いて許してっとうし」

ぎしりとセミダブルのベッドをならし、男は上体をおこすと、シャツのボタンを一瞬で（すくなくとも真理子にはそう思えた）はずし、脱ぎ捨てた。

「本当におかしくなったらさすがに可哀そうだから、手加減してたけど」

初めて目にする広い肩ときれいに筋肉のついた上腕、もりあがった胸が涙でくもる視界をおおう。

「そんな憎まれ口たたく余裕があるんなら、本気だしていいよな」

言葉とともに、顎をわしづかみにされ、まだ犯されていなかった唇を奪われた。

そこから喰いつくすような、ディープキス。ねじ込まれた強靱な舌に歯列を割られ、舌の根、口蓋をあますことなく貪られる。

「んうっ……んっ、ふんー！」

先ほどもまでの玩ぶような愛撫とは違う、熱くて苦しすぎる攻撃に、真理子は首をふって抵抗した。
がっちり顎を掴まれたままなので、一ミリも外せないけれど。

「っんくうっ！」

それどころか、抵抗したお仕置きとばかりに片手で胸をもみしだかれ、紅くはれた乳首に爪をたてられた。

ぎゅっつつぶった瞼の裏に、真っ白な閃光がはしる。

酒と風邪薬で常にならないほど敏感になり、数時間にわたり嬲られつづけた身体は、痛みすら快感にかえてしまうようである。

「んん——！」

真理子は、今夜何度目かわからない高みにほうりだされた。

「うあ……………」

ずるりと舌をぬきだされ、浅く途切れがちになりながらも、息を必死につぐ。

頬をなげる手の感触になんとか目をあけると、

「まだまだ。——壊れるまで啼かしてやるよ」

血が滴るような微笑みを浮かべる男が見下ろしていた。

真理子はただ震えながら、この見知らぬ——知っていたつもりの一男を、見つめかえすしかなかった。

彼女の困惑 彼の思惑（後書き）

これにて終了。

二人の夜は、まだつづく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3937z/>

昨日見た夢 またはいつかの妄想

2011年12月19日14時45分発行